

井野長割遺跡国史跡指定10周年記念シンポジウム

縄文時代のムラと盛土



2015年2月7日(土)
佐倉市志津コミュニティセンター

主 催
佐倉市教育委員会

後 援
千葉県教育委員会
印旛地区文化財行政担当者連絡協議会
公益財団法人印旛郡市文化財センター

タイムテーブル

9:30	開場・受付
10:00～10:15	開会挨拶
10:15～11:45	記念講演「縄文人のムラづくりと盛土形成の話」 講師：山田昌久（首都大学東京教授）
11:45～12:45	昼食
12:45～13:15	基調報告「井野長割遺跡の盛土調査」 報告：小倉和重（佐倉市教育委員会文化課）
13:15～13:45	事例報告1.「埼玉県下の盛土調査」 報告：吉田稔（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）
13:45～13:55	休憩
13:55～14:25	事例報告2.「北海道の盛土遺構」 報告：福井淳一（北海道埋蔵文化財センター）
14:25～14:45	休憩
14:45～15:45	パネルディスカッション「縄文時代のムラと盛土」 司会：山本暉久（昭和女子大学教授）
15:45～16:00	質疑応答・閉会

見学上の注意

井野小学校内に立ち入る際には
学校の承諾を得てください。



井野長割遺跡へのアクセス

- 佐倉市西ユーカリが丘5-18-1、井野小学校隣
- 京成線「ユーカリが丘駅」下車、徒歩約25分
「志津駅」下車徒歩約25分
- ユーカリが丘線「井野駅」下車、徒歩約10分

*現在、史跡は未整備のため一般公開していません。見学希望の際は、事前に佐倉市教育委員会文化課までご連絡ください。なお、駐車場はございません。

井野長割遺跡の盛土調査

佐倉市教育委員会文化課
小倉和重

1. はじめに

井野長割遺跡の盛土は、昭和44年10月の井野小学校用地造成の際と、同48年から50年のプレハブ校舎建設の際に調査が行われた。当時は「マウンド」と呼称され、その性格は不明とされていた。

その後、平成13年の土地地区画整理事業に伴う調査によって盛土の全体像が確認された。この時、すでに寺野東遺跡（栃木県小山市）で環状盛土遺構が発見されていたことが幸いし、井野長割遺跡の重要性が認識されるに至った。調査は、盛土の保存を前提に周囲のトレンチ調査に留まったため盛土の内部は不明であった。翌年、盛土の一部と目されていた小学校内の自然観察園を調査した結果、盛土であることが判明した。

井野長割遺跡の盛土についてはきわめて限られた情報しか持ちえないが、調査結果とともに私見を述べてみたい。

2. ムラの諸施設と盛土の分布

井野長割遺跡は、印旛沼に繋がる井野支谷に舌状に突き出した台地の縁辺に立地している。盛土は東側の谷に開口する窪地を囲むように、推定南北160m、東西110mの範囲に形成されている。盛土に囲まれた内側は、推定南北70m、東西60mの窪地となっている。窪地の成因は、地盤の不透水層中に溜まる地下水、いわゆる「ちゅうすい宙水」が関係しているようである。縄文時代に窪地がどのような状態であったかはわからないが、縄文人が広場としてムラに取り込んだと考えられる。

後期から晩期という長い時間幅の中で大局的に見ると、住居・貯蔵穴・墓といった諸施設は、窪地を囲む盛土に対応して環状に分布する部分と盛土の切れ目

（道）に対応して直線的に分布する部分とがあるが、とくに盛土の範囲に集中している。それとは対照的に、窪地や盛土の外側には存在しないか希薄である。道は、環状盛土を囲むように北と南から入り込む谷と連絡するようであり、ムラの存続期間中機能していたと考えられる。盛土は窪地にも小規模なものが2基存在する。外側に環状に分布する盛土の高さは、西側から東側に向かって低くなり、東側の斜面部に入り込む谷が完全に埋没した上に盛土の末端がかかっている。

斜面部では、盛土の東側で貝を含む大量の遺物が出土していることから、捨て場であったことがわかる。とくに、埋没谷には他の斜面部よりも厚い2次堆積ロームが認められる。



東側斜面の2次堆積ローム

3. 盛土の形成期間

本遺跡で盛土の指標の一つとしている土層に、2次堆積ロームがある。本土層の堆積時期の上限を知る手がかりが、盛土下の貯蔵穴や東側斜面の土坑で確認されている。第4次斜T5では、後期後葉（曾谷式）の深鉢が下層で出土した土坑を本土層が被覆する、第8次9号土坑では、後期末葉（安行2式）の小型深鉢

が本土層中より出土する、第18次1号土坑（未報告）では、後期末葉（安行1式）を主体とする土坑の上位にブロック状に堆積することから、本土層は遅くとも後期末葉（安行1式）には廃絶した住居や土坑、斜面に廃棄されていたことを示している。とくに、東側斜面の埋没谷部分で本土層がもっとも厚く堆積していることから、斜面部に集中的に廃棄した状況がうかがえる。なお、盛土外側に該当するM7の裾部では、漆黒色土層の下から本土層に被覆された晩期前葉の住居跡が検出されたことから、晩期前葉以降に意図的にここに廃棄されたことが判明した。



盛土（M7）内の住居跡（晩期前葉）

4. 盛土内の遺構

盛土の内部は暗褐色土を主体とする土層で、盛土中から多数のピットが検出された。ピットは規模・形状から住居の柱穴と考えられるが、盛土頂部から内側裾部に偏在する。また、盛土頂部にあたるトレンチからは、盛土の下層と上層において小規模な貝塚や硬化面が確認されたことから、盛土内に複数の生活面が存在していたと推測できる。

また、明確に遺構としては確認できないが、狭い範囲の盛土（M7）内でも、骨粉や焼骨、焼土、炭化粒子の混入の度合いが異なる土層が堆積している。

5. 盛土の性格

ムラを囲むための盛土であるならば、より高く、画一的な形状にすることも可能であったであろうが、そのようにしないところに盛土の性格、そして当時の文

化的側面を垣間見ることができると考える。盛土は貝塚、その他多種多様な遺物が大量に包含されている点でゴミ捨て場であるとともに、住居が構築される居住域でもあった。

また、盛土の指標とした2次堆積ロームは、窪地部分の掘削や住居・土坑などの施設の構築の際に生じる排土が、特定の場所に集中的に廃棄されたことを示している。ゴミ捨て場と居住域とは矛盾するようであるが、両者は、窪地を囲む盛土上に距離をおいて機能していたと考えられる。また、土偶や石剣などの祭祀遺物も盛土や斜面から出土している。盛土が祭祀行為の場であるか否かは、各遺跡の発掘調査に基づく検討を要するが、祭祀遺物も最終的に盛土や斜面に廃棄されている。また、斜面部は総じて廃棄場であったと考えられるが、とくに埋没谷に厚く堆積するロームは、他の斜面部と異なり複数枚に分層できることから、埋め立ての意図をもった継続的な廃棄とみることができる。

一方、盛土とは対照的に、広場である窪地の遺構・遺物の希薄な状況は、広場とそれを囲むエリアとで場の使われ方に明らかに違いが認められる。

たとえば、三輪野山貝塚（千葉県流山市）では、「大石」と呼ばれる約70kgもある石が置かれていたり、寺野東遺跡（栃木県小山市）では「石敷き台状遺構」と呼ばれる表面を石で覆った小規模な盛土が構築されているなど、広場が特別な空間であったことを表している。

井野長割遺跡の窪地内の盛土（M3・M4）の規模は、周囲の盛土とくらべると明らかに小さい。盛土の性格を考える上では、規模や土層の堆積状況とともに、配置や平面的な単位にも着目する必要があるだろう。

6. おわりに

ここで盛土の指標とした2次堆積ロームは、地山を掘り込む施設の構築の際には必然的に排出されるとともに、その上位に本来堆積していたはずの土層も多かれ少なかれ動かされる。排土の処理とその後の排土場の使われ方が遺跡ごとの盛土相に反映しているものと考え、盛土の形成過程を考える上では、貝塚や土



井野長割遺跡地形復元図